



OVERSEAS

Ethiopia —エチオピア—

海外事情【寄稿】



エチオピア見聞録



小林智司 KOBAYASHI Satoshi
国際航業株式会社/海外事業部/業務管理部

晴天の霹靂

「エチオピアですかっ!？」

これは2012年4月、海外事業部への異動が発令され、キックオフ会議の折に事業部長から告げられた指示に対し、思わず発してしまっただけの言葉である。

社会に出て30年、ほとんどを経理畑で過ごしており、「何年後には、このまま定年を迎えるのだろう」と漠然と考えていた身には、異動そのものが“晴天の霹靂”であったし、着任早々のエチオピアへの出張命令に頭の中は混乱し、しばらく呆然となってしまった。なぜなら新婚旅行以来、海外へ出か

ける機会は公私を含めて皆無であり、飛行機にさえ20年以上も乗っていない有様。まして配属先の業務管理部は、業績の計数管理をはじめとした管理業務を担う部署であり、金輪際、仕事で海外に行くことなど夢にも思っていなかった。そもそも英語には学校卒業以来全く縁が無い。

出張目的は「現地業務にあたる社員に対する適切なサポートを行なうための視察」とのこと。弊社では、毎年30以上の途上国に

対して地下水開発・給水、環境管理、廃棄物管理、防災、文化財保存、地球温暖化等の分野の開発コンサルティング事業を営んでいるが、エチオピアは最も規模の大きなプロジェクトを展開している国のひとつである。

にもかかわらず、「アフリカのどこかの国で、東京オリンピックのマラソンで優勝した“裸足のランナー”アベベの故国で、コーヒーが採れて…」程度の知識しかなく、どこか他人事のような感覚で5月下旬



図1 エチオピア周辺地図(外務省HPより)



写真1 首都アディスアベバ



写真2 メケレにて



写真3 アラムタにて

の出発日を迎えてしまった。2週間という短期間で分った風なことを書くのは如何なものかと思うが、日本に居てはまず知ることができなかった、エチオピアで実際に見聞きしてきた様子をお伝えできればと筆を取ることにした。

エチオピアの概要

エチオピア連邦民主共和国はアフリカ大陸の北東部、いわゆる“アフリカの角”の内陸部に位置する。日本からの直行便は無く、経由地のドバイまで11時間(8,000km)のフライト。さらに4時間(2,500km)をかけて首都アディスアベバによく到着する。乗り継ぎ時間を含めると実に17時間もの長旅となり、日本との時差は6時間である。ちなみに、アディスアベバはエチオピアのほぼ中央に位置し、標高2,400m、人口およそ300万人。日本でいえば地方の小都市といった趣。

東のソマリア、南のケニア、西の南スーダン、北西のスーダン、北のエリトリア、北東のジブチに囲まれた国土はおよそ日本の3倍の110万km²、その大部分がエチオピア高原を中心とする高地である。9つの州と2つの自治区からなり、人口は日本の2/3にあたる8,400万

人、農業(コーヒーと主にトウモロコシなどの穀類)や畜産を主要産業としている。

アディスアベバから東に450kmのところにあるソマリ州ジジガに空路で向かった際の地上は、見渡す限り荒涼とした大地が広がっていた。隣国ソマリアから大勢の難民が流入してきており、2011年4月にこの地方を襲ったここ60年で最悪の干ばつを契機として、UNHCR(国連高等難民弁務官事務所)の高等弁務官を務めた緒方貞子氏と欧米諸国との肝煎りで慢性的な水不足に対する支援体制を立ち上げるなど、日本との親交も深い。

エチオピアの民族

今回の訪問地は、首都アディスアベバ、北部にあるティグライ州の州都メケレからアラムタ、東部に位置するソマリ州ジジガであったが、

地方毎に色々な民族が暮らしていることを目の当たりにした。聞けば80以上の部族で構成されていて部族の数だけ言語があるとのこと。おおよそ州毎に部族は集まっているそうだが、同じエチオピア人であっても、お互いに何を話しているのか理解できないことが当然のようにあるようだ。

中でもアファール族やソマリ族の人達はファッションモデルのような美形の女性が多いらしい。世界的なファッションショーに出ている黒人系モデルは、ほとんどがソマリ族出身の人であるとのこと。アディスアベバの街中では、何時までも目が離すことが出来ない美人に出会う幸運に恵まれた。逆に誠に失礼ながら、まるで絵に描いた仙人のような出で立ちの民族衣装を纏い、手足が今にも折れそうなくらい細い老人や、鼻がかなり上



写真4 運搬手段としてのラクダ



写真5 地元産のコーヒー



写真6 インジェラとシュロ



写真7 タッジ(蜂蜜酒)



写真8 トゥフロとカイ・ワット

を向いた大変味のある顔をした老婆などがいて、新鮮な驚きを感じた。

住居の様式も地域によって異なっており、街中では鉄筋コンクリート造りの住宅もあったが、メケレから3,000m級の山を2つ越えて3時間半(200km)かかるアラマタまでの道すがらの山腹では、石を四角に切り出して積み上げただけの家や土壁を使ったものが多かった。さらに標高の高いところに点在する民家は、細めの木を立てて円筒形に囲み、藁葺きのような屋根でテントに近いイメージの家々だった。また、ジジガでは数種類の明るい色の布と思われるものを、パッチワークのように貼り合わせた半球の住居を見ることが出来た。これら家の造りもそうだが、様々な民族が集まっている国であることを肌で感じる事が出来た。

食文化

初日に滞在したアディスアベバの宿舎で、到着して直ぐに地元産のコーヒーを振舞って歓迎してくれた。床に青い草を敷いて生のコーヒー豆を炭火で煎るところから始まり、1時間ほどかけて丁寧に淹れてくれる。日本の茶道のように、決められた手順に従って客をもてなす伝統的な儀式だと教えられた。出来上がるのを待つ間、ポップコーンをお茶請けにゆっくりと歓談。

肝心の香りの方は、持病の嗅覚障害が発症中のため一切分からなかったのだが、物珍しさも手伝って十分に楽しむことが出来た。

多民族国家にあって主流を占めるアムハラ文化の主食は“インジェラ”である。一見、表面にプチプチと無数の穴が開いた薄い灰色をした塊が皿の上に乗って出てきたので、牛の内臓のようなものと思っていたが、“テフ”という穀物を磨り潰して発酵させクレープ状に焼いたもので、エチオピア人のソウルフードとのこと。発酵させているので酸味が強く、日本人では食べることが出来る人、出来ない人の差がはっきりと分かれるらしい。長期駐在している社員が「体が受け付けない」とする一方で、「日本に戻ってしばらく経つと、無性に食べたくなることもある」との意見もあった。

恐る恐る一口食べてみたところ、癖のある臭いがする訳ではなく(この時までには嗅覚は復活)、しっとりとした食感で柔らかな酸味が口の中に広がる。インジェラの味としては酸味だけなので、生肉など様々な物を乗せて食べるのが一般的なのだとか。一緒に注文した“シュロ”という豆を磨り潰してバターを混ぜたものに乗せてみるが、インジェラの酸味が勝る。だが、食べているうちに次第に慣れてきて、出張後半には、3食これで

済ませる自信は無いものの、「ビールつまみなら行ける」と思えるまでになった。

ティグライ州メケレで滞在したホテルでは、その地方の伝統料理である“トゥフロ”をご馳走になる。まず乾杯は、蜂蜜をベースに作った“タッジ”という酒。『ハクション大魔王』の壺のようなガラスの器に、量にして1合半くらいが一人前。いわば甘い“ドブクロ”といったところ。口当たりが良いのだがアルコール度数40なので、調子に乗って飲むと後悔しそうな予感がしたため、チビチビと飲む。

料理の主役“トゥフロ”は、大皿にインジェラを敷いて“カイ・ワット”という羊肉の煮込みシチューの入った器が載せられている。これにはかなりの香辛料が使われているのでヨーグルトを入れて味をまろやかにする。“ソルガム(トウモロコシ)”の粉を水で溶いて練りこんで作った鏡餅のような塊から団子サイズに丸め、インジェラの上に次々と転がされていく。二股の竹フォークで団子を刺し、カイ・ワットの中の肉を押しつけるようにつけて食べる。エチオピア流フォンデュといったところか。香辛料が効いていて食べ進むに従って体が温かくなる。

交通事情

エチオピア国内の移動は基本



写真9 地下水開発現場



写真10 給水パイプ埋設現場

的に陸路である。鉄道が無いため移動は車に頼るしかない。運転するのは現地契約スタッフで、運転が長時間に亘ることや道路状況に詳しいなどから任せることにしている。

前述したメケレからアラマタまでの行程では、かなりの“凸凹道”を行くのだろうと覚悟していたが、走り出しは想像以上に快適だった。案の定、しばらく行くうちに舗装されていない山道に突入。道幅は狭く、ガードレールはほとんど無い断崖絶壁の九十九折をかなりの速度でひた走る。交通量は少ないものの、物資を山積みしたトレーラーやトラックが、これもかなりのスピードで走っている。積載重量の差で、こちらの4WD車の方が追い抜く側。慎重な運転と見て取れるものの、案内してくれた同僚の「時々、転落する車があるんですよ!」の言葉に、それまでの眠気が一瞬に吹き飛ぶ。

エチオピアは道路の舗装率などを含め、かなり交通事情は悪いものと見受けられた。アディスアベバの中でさえも信号が全くといっていいほど無く、幹線道路でも時々ひよいと人が横断してきたり、歩道が無いので車道部分を平気で歩いていたりするので人身事故

も多いと聞く。また日本では考えられない話だが、遊牧民の家畜の群れを避けようとして、荷を満載したトラックが、バランスの悪さから横転してしまうことが珍しいことではないそうだ。

家畜といえば、様々な動物たちを畑の中や山道に限らず街中でも見ることが出来た。水牛のような立派な角を持った牛。ロバ、ヤギにヒツジにラクダ。ラクダなどは動物園でしかお目にかかったことは無かったが、車道を30頭近くが群れをなして歩いて来たのには肝を潰した。走行の邪魔になるのでクラクションを鳴らすと、その音に驚いたラクダ達が一斉にこちらを見て目が合ってしまったことに二度吃驚! 30頭のラクダの視線が自分に集中したのは腰が引けた。一生の中でこんな経験は後にも先にもこれ一回限りだろう。

後方支援

駆け足でエチオピアという国を見てきたが、日本とあまりに異なる文化や環境に毎日が驚きと感動の連続であった。ほとんど車の中から見るだけで通り過ぎた街並みには、流木のような木々で組まれた足場に囲まれた、明らかに建設を中断しているビルや、店舗は営

業をしているものの、その屋根の部分には鉄筋が中途半端に伸びている建物が数多くあり、訪れたどの場所もどこか寂しげであった。何れも完成させるだけの資金が無く、出来るところまで進めておこうということらしい。また、電力事情も悪く頻繁に発生する停電や日中でも薄暗い店舗など、電気や水道が当たり前のようにある日本が如何に恵まれた国であるのかを実感させられた旅でもあった。

その国の諸事情はあるだろうし、伝統・文化・宗教などを背景とした考え方や習慣の違いを否定する心算は毛頭も無い。しかし地下水開発の現場を視察した際に、小さな女の子が自分の体重の半分にも近いような水タンクを担いで何kmも歩いて水を汲みに来る姿には胸が痛んだ。

管理部門を担う立場では、そのような国々に対して直接的に役立つ術は持ち合わせてはいないが、後方支援を精一杯努めることで、微力ながら国際社会への貢献に参加していこうと改めて考えている。

<参考資料>
外務省ホームページ「各国・地域情勢」>アフリカ>エチオピア連邦民主共和国
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ethiopia/>)